

令和元年6月14日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04604

研究課題名（和文）教職の社会化過程としての「観察による徒弟制」に関する研究

研究課題名（英文）The "Apprenticeship of Observation" as teacher socialization in Japan

研究代表者

太田 拓紀 (Ota, Hiroki)

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：30555298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童生徒時代の学校生活とそこでの教師との関わりを、教職の社会化過程の一部とみなす「観察による徒弟制」の理論的枠組に依拠し、過去の学校経験が教員志望者にいかなる影響を及ぼしているかを検証した。まず、海外で広く進められてきた「観察による徒弟制」研究の概観を探り、本理論がわが国の教師研究や養成教育でも十分に適用可能なことを示した。また、教員養成学部生に対して質問紙調査と面接調査を実施し、過去の学校経験が、養成段階における学習意欲や教育観の維持や変容に、一定の影響をもたらしていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外では研究蓄積がある一方、わが国の教師教育ではほとんど顧みられなかった「観察による徒弟制」について、研究動向の概要をまとめ、その理論的枠組を紹介することができた。また、「観察による徒弟制」による教師教育への影響やそれに伴う問題を実証的に明らかにした。以上の成果は、教師の職業的社会化研究、教師教育研究の新たな視野を開く契機になったと考えられる。また、養成段階以前の社会化過程と養成教育の接続関係という、従来、教師教育において見落とされてきた課題を提起したことで、養成教育の質の向上に資する新たなパースペクティブを提供したといえる。

研究成果の概要（英文）：The socialization of teachers is presumed to mainly occur during their school as pupils in close contact with teachers. This process is defined as an "Apprenticeship of Observation" (Lortie 1975). From this theoretical framework, this study examined the influence that past school experience has on pre-service teachers in Japan.

I first considered previous overseas studies on the "Apprenticeship of Observation." Consequently, the theory applies to teacher education and socialization in Japan. Furthermore, through a questionnaire and interview survey for the preserve teachers, it became clear that their past school experience influences their motivation for learning in university and the educational beliefs they hold.

研究分野：教育社会学

キーワード：「観察による徒弟制」 教師の職業的社会化 教師教育 教員養成

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)問題の所在

ローティは、生徒時代に無数の授業を受ける過程や教師との対面的な関わりを「観察による徒弟制」(Apprenticeship of Observation)と定義し、この過程が教職を目指す者に対し特別な影響をもたらしていると論じた(Lortie 1975, p.61)。しかし、「観察による徒弟制」による社会化作用は、単純で柔軟性のない教育観・教職観を生成したり、大学での養成教育の効果を弱めるといった負の効果が指摘されており(Feiman-Nemser 2001 など)、教員養成の段階にて十分に留意すべき側面と考えられている。

(2)先行研究の状況

「観察による徒弟制」に基づく教師研究は、米国を中心に広く海外にて発展してきた。具体的には、「観察による徒弟制」による具体的な社会化のありようや、それによってもたらされる問題を明らかにしようとする研究や、「観察による徒弟制」に起因する課題をいかに養成教育で克服し、教師の適切な成長に結びつけていくかを検討する研究などがある。しかしながら、わが国に限ると、「観察による徒弟制」に関わる研究は、太田(2012)の他は、ほとんど進んでいない状況にある。

2. 研究の目的

本研究は、ローティの「観察による徒弟制」理論に着目し、それに伴うわが国の教師の社会化過程を検討しようとするものである。具体的には、以下の3点を検証した。

(1)海外における「観察による徒弟制」研究の調査とその考察

海外で進展してきた「観察による徒弟制」研究が、わが国にて十分に紹介されてこなかったことに鑑み、主に米国の先行研究を精査し、その概観を把握する。この作業を通じ、教師教育における「観察による徒弟制」の意義をより一層明確にする。また、「観察による徒弟制」の理論が、わが国の教師教育研究や教員養成でも適用可能かについて考察を加える。

(2)「観察による徒弟制」の社会化過程で内面化された教育観の分析

「観察による徒弟制」の過程で内面化された教員志望者の教育観や教職観とは、具体的にどのようなものか。彼らにみられる教育的なパースペクティブの特徴を実証的に明らかにする。

(3)「観察による徒弟制」と養成教育・現職教育との接続関係の分析

「観察による徒弟制」による社会化の結果が、わが国の大学での養成にいかなる影響をもたらし、どのような問題を引き起こしているかを実証的に明らかにする。その上で、「観察による徒弟制」と養成教育や現職教育との望ましい接続のあり方を検討する。

3. 研究の方法

(1)海外における「観察による徒弟制」先行研究の調査

海外の「観察による徒弟制」に関する文献調査を実施する。それらを分類・整理し、研究の全体像と意義について明らかにする。その上で、日本での研究の適用可能性とその方法について検証する。

(2)「観察による徒弟制」に関する質問紙調査・面接調査の実施と分析・考察

「観察による徒弟制」の過程で内面化される教育観・教職観とはいかなるものか。この点を解明するため、教員志望の大学生を対象にした質問紙調査(集合調査)を行う。さらに、彼らに対して面接調査を実施し、その特徴を具体的に聞き取ることで、質問紙調査の結果を補強する。以上の分析結果をふまえ、「観察による徒弟制」が養成段階の教育効果を減じる問題(Feiman-Nemser 2001 など)について考察する。さらに、「観察による徒弟制」との関連が想定される、入職時の職務適応の問題について検討する。

4. 研究成果

(1)海外における「観察による徒弟制」研究の概要

海外の「観察による徒弟制」研究に関する文献調査を実施した。数多くの先行研究によってもたらされた知見は、次のように要約できよう(詳細は、太田2017を参照)。

「観察による徒弟制」の社会化作用

「観察による徒弟制」の過程で、教員志望者は教えることや教職についてのイメージ、信念を強固に形成する。しかし、そのイメージや信念は、権威主義的、保守的な性格をもつ場合が多く、入職後もそれをしばらく保持する傾向がある。また、「観察による徒弟制」を経て形づくられた教育行為についてのパースペクティブは、生徒側の視点に限定されており、単純なものでしかない。さらに、教員志望者が将来の生徒を思い描く際、そのモデルに自己を設定しがちであり、多様かつ複雑な教育的背景をもつ子どもの実態を十分に想定できないという。

つまり、「観察による徒弟制」によって、教員志望者は、教育に関する新たな考え方や革新的な実践方法を受け入れにくくなっている。実際、「観察による徒弟制」を経て形成された教えることや教職に関する自己の信念に基づき、教員志望者は、養成プログラムのうち何が有益であり何がそうでないかといった判断を自ら下してしまう。そのため、養成段階において、自身の経験からは逸脱するような教育学の内容を、学ぶべき対象から外してしまうという。こうしたことで、学生たちは養成教育の機会を限定させてしまい、成長の可能性を狭めてしまう。

「観察による徒弟制」の克服と教師教育者の役割

こうした「観察による徒弟制」の弊害に陥らないために、教員志望の学生は、自らの「観察による徒弟制」の過程がいかなるものであったかを認識し、それを克服しようとしなければならない。そのためには、深く刻印されている「観察による徒弟制」の過程を、意識のレベルに浮上させ、自己分析することからはじめるべきという。そして、自らが抱く教育的な信念を批判的に検証することにより、養成段階にて教えることや学ぶことに関する新たな視野を受け入れられるようになる。また、「観察による徒弟制」を克服するためには、これまでの学校経験とは異なる事例に触れることも重要である。つまり、教員志望者は、自らの「観察による徒弟制」の過程ではあまり出会わなかった教師のあり方や教授法に接する必要がある。

そして、大学の教師教育者は、以上のような活動を手助けするプログラムや指導を施すべきとされる。例えば、学生らの過去の学校経験をリストにして挙げ、それが教育学の理論的な枠組にも耐えうるものかを分析させる指導法が提案されている (Grossman 1991)。また、「観察による徒弟制」を経て得られた知見に対し、それを揺さぶるような革新的かつ極端な実践事例を経験させることも有効であるという (Calderhead and Robson 1991)。

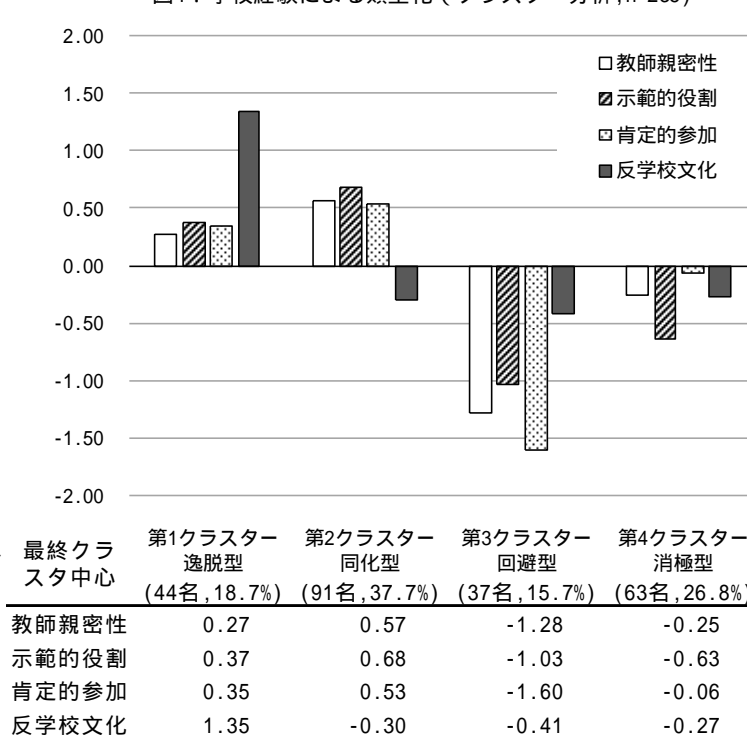
こうした先行研究が指摘・提案する内容は、わが国でも大いに適合すると推測された。

(2) 「観察による徒弟制」に基づく教員養成学部生の類型分析

教員養成学部生を対象に、質問紙調査と面接調査を実施して、「観察による徒弟制」の枠組から、教員養成学部新入生の学校経験を類型化し、それに応じた教職観の特徴を検証した。

まず、多変量解析により、教員養成学部生の学校経験を4つに分類した(図1)。その中心はリーダー役割を担い、教師と親密な関係を築くといった学校文化への同化であり、この類型が4割弱を占めていた。逸脱的な学校経験が目立つ類型は2割ほどであったが、この群は向学校文化の経験も豊富であり、同化型に近いといえた。一方、リーダー役割を担わない消極的な類型には約25%、また、学校生活に困難が伴うなどで、学校や教師との関わりを全般的に回避してきた傾向のある類型には15%程度存在していた。

図1：学校経験による類型化(クラスター分析, n=235)



出典：太田(2018, p.71)

その上で、4つの類型ごとに教職観の特徴を検証した。結果として、過去の学校経験は教員志望者の教職観に一定の影響を及ぼしていることが実証された。例えば、教師の連携・協働、子どもに対する影響について、向学校文化の経験が豊かな者は、自らの経験をふまえて高く評価し、そうした経験が希薄な場合は低く見積もる傾向があった。一方、教師の社会的地位については、学校経験以上に周囲の情報に基づいて判断を行うことが多く、全般的にマイナスのイメージをもっていた。そのなかでも、学校と距離をおき、教師との関わりを回避する傾向のあった群は、自らの経験に基づいて教師の社会的地位を一層低く評していると考えられた。

(3) 「観察による徒弟制」と養成教育との接続関係

「観察による徒弟制」の枠組に基づき、1年間の養成教育を経て、教員志望者の学校経験が大学での学習態度や教育観・教職観の生成と変化にいかなる影響を与えたのかについて検証した。方法としては、質問紙調査と面接調査を併用した。

まず、「観察による徒弟制」と教員志望の程度との関係について、(2)で得られた学校経験4類型すべてにおいて、1年間で教職志向は弱まった。しかし、学校文化の中心からは距離をおく経験をしてきた学生(回避型、消極型)は、とくに高い教職志望が冷却されやすかった。今後の継続調査の結果が待たれるものの、学校文化に適応していなかった者は、養成段階にて教職への進路を自ら離脱していく可能性が示唆された。

次に、養成段階での学習態度について、反学校文化の経験が相対的に顕著な学生は、授業の出席傾向が弱く、過去の学校生活での姿勢を引き継いでいると推測された。この逸脱型の学生のなかには、大学の授業に対する不満や疑問をもつ者がいた。Feiman-Nemser (2001)などが指

摘する、養成段階にて自らの意に沿わない授業や学習内容を退けてしまう「観察による徒弟制」の問題は、彼らを中心に引き起こされている可能性があると考えられた。

最後に、教育観に関してであるが、1年間で全体として変化するものと、学校経験の類型に応じて固定化されているものに分類できた。このうち、変化するものは学校経験に根ざさない教育観であった。これらの教育観は関連する知識を養成段階にて学習し錬磨が可能のため、変化が比較的容易であるといえた。一方、学校経験の類型によって違いが明確で、1年間で変化しないのは、自身の学校経験に根ざした教育観と考えられた。それらは自らの経験に直接由来しているため、深く定着し固定化していると思われる。「観察による徒弟制」で生成される教育観の特徴は、非常に強固で養成教育では容易に変化しない点にあるが (Tabacnick and Zeichner 1984)、直接的な経験によって強く印象づけられて内面化した教育観が、それに該当すると推測された。

引用文献

- Calderhead, James and Maurice Robson, 1991, "Images of Teaching: Student Teachers' Early Conceptions of Classroom Practice", *Teaching & Teacher Education*, vol.7, no.1, pp.1-8.
- Feiman-Nemser, Sharon, 2001, "From Preparation to Practice: Designing a Continuum to Strengthen and Sustain Teaching", *Teachers College Record*, vol.103, no.6, pp.1013-1055.
- Grossman, Pamela L., 1991, "Overcoming the Apprenticeship of Observation in Teacher Education Coursework", *Teaching and Teacher Education*, Vol.7, No.4, pp.345-357.
- Lortie, Dan C., 1975, *Schoolteacher: A Sociological Study*, The University of Chicago Press.
- 太田拓紀, 2012, 「教職における予期的社会化過程としての学校経験」『教育社会学研究』第90集, pp.169-190.
- 太田拓紀, 2018, 「『観察による徒弟制』に基づく教員養成学部生の類型分析 - 教職の社会化過程としての学校経験と教職観 - 」滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター『パイディア』第26巻, pp.69-76.
- Tabacnick, Robert B. and Kenneth M. Zeichner, 1984, "The Impact of the Student Teaching Experience on the Development of Teacher Perspectives", *Journal of Teacher Education*, vol.35, no.6, pp.28-36.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- 太田拓紀, 2017, 「『観察による徒弟制』と教員養成における実践の問題」滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター『パイディア』第25巻, pp.93-99. (査読無)
<http://hdl.handle.net/10441/15124>
- 太田拓紀, 2018, 「『観察による徒弟制』に基づく教員養成学部生の類型分析 - 教職の社会化過程としての学校経験と教職観 - 」滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター『パイディア』第26巻, pp.69-76. (査読無)
<http://hdl.handle.net/10441/15335>
- 太田拓紀, 2019, 「『観察による徒弟制』と教員養成との接続関係 - 教員養成学部生の学校経験と養成教育1年間の社会化過程 - 」『滋賀大学教育実践研究論集』第1号, pp.45-53. (査読無)
<http://hdl.handle.net/10441/00015775>

〔学会発表〕(計2件)

- 太田拓紀, 2017, 「教職の社会化過程としての『観察による徒弟制』とその類型分析」日本教師教育学会第27回研究大会, 奈良教育大学.
- 太田拓紀, 2018, 「『観察による徒弟制』と教員養成段階における接続関係の分析 - 教員養成学部生の学校経験と養成教育での社会化過程 - 」日本教師教育学会第28回研究大会, 東京学芸大学.

〔図書〕(計1件)

- 太田拓紀, 2018, 「教師文化と学校」『教職教養講座第12巻 社会と教育』協同出版, pp.43-60.